

長崎県農林技術開発センター



センターニュース

巻頭言

.....-1-

- お肉への想い
- 表紙の写真

研究成果

.....-2-

- 薄紫ピンク色で大輪のスプレーカーネーション新品種「ほほえみ」の開発
- 腐植酸液肥の施用でアスパラガスの収量が増加
～栽培途中における保肥力と肥効アップ～
- スイートコーンにおける緑色発光ダイオードとBT剤の組合せによるヤガ類の減化学農薬防除体系
- ピワ「麗月」の無核果実生産法
- 泌乳後期の乳牛における極短穂型飼料用イネ品種「たちすずか」の給与特性

研究紹介

.....-7-

- バレイショにおける青枯病抵抗性の室内評価法の開発
- 4月出荷量増加のためのバレイショ「アイマサリ」安定生産技術の確立
- ハラン切り葉の品質向上技術の開発について
- 低コスト生産を目指した黒毛和種(肉用牛)雌牛肥育技術の確立

お知らせ

.....-11-

- 農林技術開発センター研究成果報告会の開催
- 干拓学童体験

上:カーネーション育成品種「ほほえみ」
下:カーネーション育成品種「ももかれん」

巻頭言



農林技術開発センター
副所長兼
畜産研究部門長
本村 高一

表紙の
写真

お肉への想い

昭和生まれの私には、お肉は特別な食べ物でした。「力を付けるためにはなんとついても肉」、「何かの記念日に肉」というように、ビフテキをはじめハンバーグ、カツ丼、鶏のもも焼き・から揚げ、プレス火腿やソーセージ等々、生まれた時にはなかった美味しい肉料理や肉製品が次々と現れ、昭和の子供達は、心を魅了され、親は子供にこれらを食べさせることで幸せな気持ちになっていたのだと思います。

現在では、他産地とロットを競い、品質や効率性で勝つために、育種、生産技術に係る研究開発が日進月歩で進められています。

たとえば鶏肉の場合、昭和の後半では、孵化後60日齢で約2.6kgまで成長し、1㎡当たり13羽出荷していたものが、最近のIOT機能を持つウインドレス鶏舎では、孵化後46日齢で2.9kgとなり1㎡当たり18羽の出荷が行われています。肉の味もよりジューシー（多汁性）で弾力のあるものとなっています。なお、一味違う「対馬地鶏」の開発も行われています。

また、豚肉の場合、多産系の繁殖豚が開発され、昭和後期では母豚1頭当たり年間肉豚出荷頭数が16頭であったものが、現在では20頭台を超え、全国的に見ると30頭に迫る著しい生産効率の向上がみられています。品質についても飼料中のアミノ酸バランスを考慮したり、飼料米や未利用資源を給与するなどして、豚肉の多汁性（ジューシネス）や味、脂の風味などの向上が進んでいます。

さらに、牛肉の場合、「長崎和牛」が本県の高級銘柄となっておりますが、肥育前半に良質な牧草をできるだけ多く食べさせることで、胃の中の微生物を多くし胃の環境を整え、ロースの成長の障害となる筋間脂肪を抑え、十分な発育を短期間で達成させる本県独自の「長崎和牛」の飼養管理技術を開発することができました。今後は、単にBMS（サシの量）だけではなく、サシの形状がいかにか小さいか（小ザシ）、肉の粗脂肪含量がイノシン酸やグルタミン酸などのうまみを感じるための適正な量であるか、またオレイン酸などの脂肪酸組成など、和牛の美味しさについての新たな知見をふまえながら、「長崎和牛の美味しさと経済性の追求」をテーマに研究を進めていきたいと思っております。

センターが開発したカーネーション品種について

カーネーションは本県花き生産の主力品目ですが、オリジナル品種開発については、平成16年度から取り組み、平成30年度に薄ピンク色の大輪でボリュームのある「ほほえみ」を開発しました。

また、農研機構と共同で重要病害の萎凋細菌病に抵抗性をもつ品種の開発に取り組み、平成30年度に抵抗性を有し濃いピンクで大輪の「ももかれん」を開発し、両品種とも平成30年10月に品種登録出願公表となりました。

「ほほえみ」については、p2に詳細な研究成果を掲載しておりますので、ご覧ください。



薄紫ピンク色で大輪のスプレーカーネーション新品種「ほほえみ」の開発

●背景・ねらい

農産園芸研究部門 花き・生物工学研究室

カーネーションは、本県花き生産においてキクに次ぐ主要品目です。近年、輸入の増加により単価が低迷し、燃油価格高止まりや種苗費上昇により県内農家の経営は厳しい状況にあります。このため、単価向上、種苗費低減による経営改善を目指し、本センターでは2004年度からオリジナル品種の開発に取り組み、これまでに5品種を開発しています。

ここでは、新品種「ほほえみ」を開発したので(2018年10月25日出願公表、出願番号33169)、本県オリジナル品種の主力で同じピンク色の「だいすき」と比較しての品質、収量、形質等について紹介します。



主任研究員 竹邊 丞市

■表1 「ほほえみ」の月別の切花品質及び収量(2017年度)

品種名	採花開始日	月	切り花長 (cm)	切り花重 (g)	有効花蕾数 (輪)	下垂度	採花本数/株 (本)	累積 (本)	
ほほえみ	10月28日	10月	72.3	40.0	4.3	3.0	0.1	0.1	
		11月	76.5	44.1	3.6	1.7	1.2	1.3	
		12月	77.2	46.3	4.0	1.8	1.0	2.3	
		1月	79.9	52.7	3.9	1.3	1.4	3.7	
		2月	84.7	65.4	4.6	1.0	0.8	4.5	
	だいすき	11月6日	3月	86.7	82.7	5.3	1.0	0.9	5.4
			4月	86.7	98.7	6.1	1.0	1.2	6.6
			5月	83.7	86.2	6.3	1.0	1.3	7.8
			10月	68.0	32.0	5.0	1.0	0.0	0.0
			11月	78.7	37.4	5.0	1.0	1.5	1.5
ほほえみ	11月6日	12月	78.7	38.3	4.8	1.0	2.3	3.8	
		1月	79.6	45.6	5.1	1.0	0.8	4.5	
		2月	81.7	54.5	5.0	1.0	0.4	5.0	
		3月	78.4	64.4	6.5	1.0	0.5	5.4	
		4月	78.7	72.7	8.1	1.0	1.7	7.1	
ほほえみ		5月	79.5	61.6	7.9	1.0	1.7	8.8	



■写真1 「ほほえみ」(左)と「だいすき」(右)の花型と花色



■写真2 「ほほえみ」の草姿

※1:ビニールパイプハウスに6月21日定植。翌年5月21日まで調査。
 ※2:下垂度は、切り花先端から50cmの位置で水平に保持し、下垂した角度。0~10°を1とし、90°までを9段階に分類した数値。

■表2 「ほほえみ」の切り花形質及び花持ち(2017年度)

品種名	花径 (cm)	花弁数 (枚)	花梗長 (cm)	二次花柄数 (本)	二次花柄長 (cm)	無効側枝数 (本)	花持ち日数	
							無処理	前処理
ほほえみ	6.4	79.7	10.9	0.8	3.3	0.45	12.2	13.2
だいすき	4.4	34.2	10.4	2.0	3.3	3.30	10.2	13.2

※1:花の品質は12月4日~2月8日採花の切り花から8本を抽出し調査。
 ※2:無効側枝数は12月13日~2月8日採花の切り花から40本を抽出し調査。
 ※3:花持ち調査は12月15日~1月5日採花分で実施。2輪が外花弁水平状態の開花ステージで採花し、無処理区は水道水、前処理区はクリザールK-20C1000倍液に4°Cで10時間水揚げ後、室温25°C、湿度60%、1000lux12時間日長に設定した恒温室で調査した。

●研究成果

「ほほえみ」は、6月21日定植で採花開始が10月28日となる中生系統で、5月12日までの採花本数は7.8本になります。「だいすき」に比べると花径は2cm大きく、花弁数も2倍以上の約80枚と非常にボリュームがあります。また、2次花柄数(孫芽)は1本以上少なく無効側枝数(腋芽)も3本弱少なくなり、栽培管理や出荷調整作業の省力化に繋がります。花持ちは無処理では2日長くなります。

県内産地では主要花色であるピンク系は色の差異により5品種程度作付されており、今後、中輪の「だいすき」、大輪の「ほほえみ」のピンク色二本立てで長崎カーネーションのブランド化を一層推進できると考えています。なお、「ほほえみ」は、今年6月、県内3産地で計4,000株が初作付される予定です。

腐植酸液肥の施用でアスパラガスの収量が増加 ～栽培途中における保肥力と肥効アップ～

環境研究部門 土壌肥料研究室

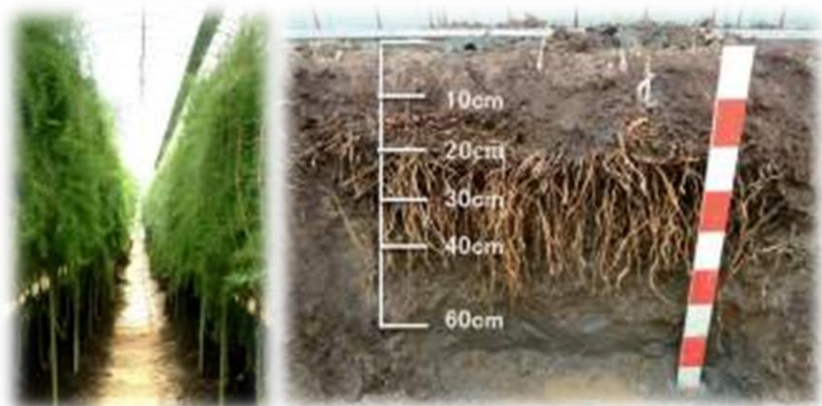
● 背景・ねらい

アスパラガス栽培は有機物を多く含む肥沃な土壌で収量が高いとされます。そこで、長崎県内の主要産地の調査において、土壌肥沃度の指標である塩基置換容量(Cation Exchange Capacity; CEC)に着目し、アスパラガスの年間収量との関係を解析しました。また、アスパラガスは栽培の途中で土壌を改良するための耕うんができない多年性作物であることから、CECの上昇に有効と考えられる粘土鉱物資材や腐植資材を表面施用して比較検証を行いました。

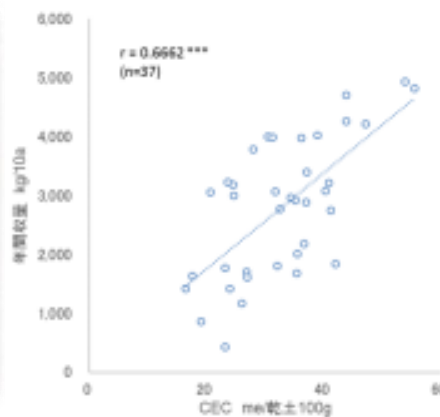


室長 井上 勝広

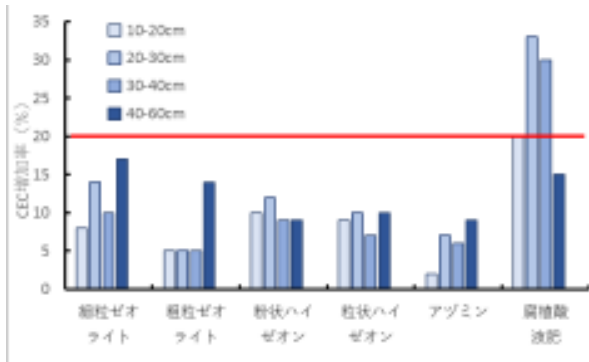
■ 図1 アスパラガス圃場のCECと年間収量の関係



■ 写真1 アスパラガス栽培の地上部と地下部



■ 図2 粘土鉱物、腐植資材による施用2か月後のCEC増加率



■ 図3 腐植酸液肥がアスパラガスの収量におよぼす影響

年	処理	総計重量	可販物		L級以上	
			重量	1本重	重量 (%)	重量 (%)
2017	無処理	83	82	19	62	74
	500倍	90	89	17	55	61
	100倍	104	103	19	73	70
2018	50倍	93	93	18	59	63
	無処理	99	98	20	71	71
	500倍	101	100	18	67	66
	100倍	111	111	19	76	69
	50倍	112	111	18	72	64

単位は1a当たりkg, g/本, %は総重量に対する百分率

● 研究成果

土壌CECが高い圃場ほどアスパラガスの収量が高いことが明らかになりました。粘土鉱物や腐植資材を土壌に施用することにより、土壌CECは増加し、特に腐植酸液肥の効果が高くなりました。アスパラガスの栽培途中でも投入可能な腐植酸液肥の施用により、アスパラガスの総収量と可販収量は増加し、特に100倍処理で最も多収となりました。最も単価の高いL級以上(18g以上)の収量も100倍処理で最も多くなりました。



スイートコーンにおける緑色発光ダイオードとBT剤の組合せによるヤガ類の減化学農薬防除体系

● 背景・ねらい

スイートコーン栽培では、黄色灯によるヤガ類の防除をおこなうと雄穂の出穂遅延や雌穂先端が包皮から突き出る、先端突出の生理障害が発生することを確認しています。

また、緑色発光ダイオードを使用して、ヤガ類に対する防除効果を検討しましたが、化学薬剤防除に比べると防除効果がやや低い結果になりました。

そこで、スイートコーン栽培における緑色発光ダイオード点灯と生物農薬(BT剤)を組み合わせたヤガ類の減化学農薬防除体系と併せて雄穂出穂・雌穂への影響を検討しました。

干拓営農研究部門



専門研究員 芳野 豊

■表1 処理区別の食害雌穂率

表1 各区の食害雌穂率

処理区	食害雌穂率 (%)	
緑色LED+BT剤(2回散布)	8	b ^z
緑色LED	27	ab
BT剤(2回散布)	20	ab
化学農薬防除(4回散布)	13	b
無防除	35	a

1区20雌穂3反復調査

^z縦の異なる文字間にはTukey-WSDの多重検定により5%レベルで有意差あり



雌穂の先端異常突出

■表2 各区の出穂率推移・雌穂調整重・雌穂異常突出率

表2 各区の出穂率推移・雌穂調整重・雌穂異常突出率

区	出穂率(%)						調整重 (g/個)	異常突出率(%)
	6/5	6/8	6/10	6/12	6/14	6/16		
緑色LED+BT剤(2回散布)	0	70	95	97	100	100	388	0
緑色LED	0	72	92	98	100	100	369	0
BT剤(2回散布)	0	48	80	98	98	100	380	0
化学農薬(4回散布)	0	57	78	85	93	100	371	0
無防除	0	68	92	95	97	100	377	0
有意性	n.s.	n.s.	n.s.	n.s.	n.s.	n.s.	n.s.	

出穂率: 1区20株3反復調査 調整重・異常突出率: 1区20雌穂3反復調査

有意性: Tukeyの多重検定によりn.s.は有意差なし。なお、出穂率、異常突出率は逆正弦変換後の統計処理

● 研究成果

緑色LED点灯とBT剤との組合せによる減化学農薬防除体系は、化学農薬防除体系とヤガ類に対する被害軽減が同等でした。緑色LED点灯単独では、ヤガ類に対する被害軽減を示すものの化学農薬防除体系に比べてヤガ類に対する被害軽減がやや低い傾向を示しました(表1)。また、緑色LED点灯はスイートコーンの出穂時期を遅延や雌穂の異常突出も発生させず、雌穂調整重に対する影響を与えないことが確認できました(表2)。

今回の試験は緑色LEDを区の両側に高さ3mで設置した試験結果ですが諫早湾干拓地では、広範囲で効率的な照射が可能な緑色LEDの開発と検討が必要です。



ビワ「麗月」の無核果実生産法

● 背景・ねらい

ビワ「麗月」は果皮および果肉が黄白色で、食味の優れた施設栽培向きのビワ品種として当センターにて育成された品種ですが、自家不和合性(同一品種間で授粉が出来ないこと)であることが確認されたことから、有核果実として安定生産にするためにはミツバチの放飼などによる他品種との授粉作業が必要となります。

今回、自家不和合性の「種子を作りにくい」という特性を活かし、既に3倍体ビワで処理方法が確立されているジベレリン(GA)およびホルクロールフェニユロン(F)処理を参考に、ビワ「麗月」を用いた無核果実生産の可能性を検討しました。

果樹・茶研究部門
ビワ・落葉果樹研究室



専門研究員 松浦 正

■表1 混用散布処理(GA200ppm+F20ppm)によるビワ「麗月」の無核果実の品質(2016年度)

1回目処理	2回目処理	果実重(g)	縦径(mm)	横径(mm)	糖度(brix)	酸含量(g/100ml)	赤道部果肉厚(mm)	しいな ^z 混入率(%)	無核 ^y 果率(%)
満開7日前	35日後	58.4 a ^x	59.7 a	41.5 b	12.1 b	0.24 b	13.5 a	7.1	100.0
	60日後	55.1 ab	57.7 a	41.3 b	12.2 b	0.28 a	13.5 a	0.0	100.0
満開期	35日後	54.6 b	58.0 a	40.1 b	12.0 b	0.24 b	13.7 a	3.6	100.0
	60日後	53.4 b	59.3 a	40.4 b	12.2 b	0.25 b	13.2 a	1.2	100.0
	無処理 ^w	56.1 ab	44.1 b	45.3 a	13.1 a	0.23 b	9.8 b	38.9	0.0

^z 5mm以上の「しいな」の含まれる割合

^y 完全種子を含まない割合

^x 縦の異なる文字間には、Tukeyの多重検定により5%の有意差有り

^w 満開時に「長崎早生」および「なつたより」花粉で人工授粉を実施



■ 写真1 無核果実の断面
※果芯部に空洞が出来、種子痕が残る



■ 写真2 有核果実(左)と無核果実(右)
※有核果実は丸く、無核果実は縦長型

● 研究成果

ビワ「麗月」では、ジベレリン(GA)200ppmおよびホルクロールフェニユロン(F)20ppmに調整した混合液による散布処理を、1回目は満開7日前から満開期の花房へ、2回目を1回目処理後35日から60日後の果房に処理することで、無核果実を生産することが出来ることを明らかにしました。なお、本成果をもとに「麗月」におけるGA及びFの使用が農薬登録されました。



泌乳後期の乳牛における極短穂型飼料用イネ品種「たちすずか」の給与特性

● 背景・ねらい

近年開発された「たちすずか」は、牛が消化しにくい穂の部分の短く、エネルギー源となる糖分を茎や葉に多く含む飼料用イネです。従来品種にはないこの特長を活かし、「たちすずか」が、これまで乳牛のエネルギー源とされてきたコーンサイレージや輸入乾草など、従来型粗飼料の代替となる新たな粗飼料源として、今後価値が高まることが期待されています。

本県では、「たちすずか」と同等の特性を持つ「たちあやか」について、泌乳前期(日乳量40kg程度)の乳牛へのTMR給与において、乾物中20%(乾物給与量5kg程度)混合しても、飼料摂取量および泌乳成績に影響がないことを確認しています(永井ら、2015)。

今回、「たちすずか」を、乾物中30%および40%(乾物給与量7kgおよび10kg程度)混合したTMRを、泌乳後期(日乳量15kg程度)に給与した場合の、飼料摂取量および産乳性に与える影響について検討しました。

畜産研究部門 大家畜研究室



主任研究員 堤 陽子

■ 図1 飼料摂取量

	TMR飼料				原物摂取量 (kg/日)	「たちすずか」 原物摂取量 (kg/日)
	DM摂取量 (kg/日)	TDN摂取量 (kg/日)	DM充足率 ²⁾ (%)	TDN充足率 ²⁾ (%)		
0%区	23.9 ± 0.7 ^{ns1)}	17.4 ± 0.5 ^{ns}	134.2 ± 7.1 ^b	142.9 ± 18.9 ^{ns}	39.9 ± 1.1 ^{ns}	0
30%区	24.9 ± 3.0	17.6 ± 2.1	149.8 ± 3.7 ^{ab}	159.6 ± 25.1	40.5 ± 4.9	18.1 ± 2.1
40%区	26.4 ± 0.7	18.5 ± 0.5	157.7 ± 13.3 ^b	175.4 ± 33.0	43.3 ± 1.9	25.1 ± 0.7

平均値±標準偏差

1) nsは、5%水準で有意差なし。異なるアルファベットは5%水準で有意な区間差を表す(Tukey多重検定)。

2) 充足率は、日本飼養標準(乳牛)乳用牛養分要求量計算式により算出した要求量に対する数値。

■ 図2 泌乳成績

	乳量 (kg)	乳脂肪 (%)	乳蛋白質 (%)	乳糖 (%)	無脂固形 (%)
0%区	16.96 ± 1.26 ^{ns1)}	4.83 ± 0.41 ^{ns}	4.28 ± 0.53 ^{ns}	4.38 ± 0.31 ^{ns}	9.83 ± 0.53 ^{ns}
30%区	14.74 ± 5.57	4.94 ± 0.87	4.26 ± 0.62	4.27 ± 0.44	9.69 ± 0.46
40%区	15.07 ± 4.26	5.02 ± 0.77	4.26 ± 0.55	4.31 ± 0.39	9.73 ± 0.46

平均値±標準偏差

1) nsは、5%水準で有意差なし(Tukey多重検定)。

● 研究成果

「たちすずか」は、糖分が豊富な反面、蛋白質に乏しいため、大豆粕等の他資材で補う必要があるものの、サイレージ化した「たちすずか」を、乾物中40%(TMR乾物26kg中10kg程度)配合し給与しても、嗜好性は高く、栄養要求量を充足でき、泌乳成績もコーンサイレージ等によるTMRと比較して遜色無いものでした。

今回の結果は、分娩間隔の延長等により乳量の低い時期の飼料費削減に活用できます。今後更に、泌乳量の多い時期の乳牛にも「たちすずか」を多給できないか検討します。



バレイショにおける青枯病抵抗性の室内評価法の開発

●背景・ねらい

長崎県のバレイショの栽培では、青枯病という土壌病害が問題となっており、本センターは青枯病に強いバレイショ品種の育成に取り組んでいます。これまで、青枯病に強い(抵抗性)のバレイショの選抜には、青枯病汚染圃場に植え付けて数か月栽培して発病程度を調査する、圃場での試験をしていました。この方法では栽培時の天候等による影響で結果が変わることから、正確な抵抗性程度を評価するには数年が必要でした。

そこで、新しい効率的な評価方法として、試験管内で抵抗性程度を評価できる方法を開発しています。この方法は、試験管の中で試験ができるので、圃場での試験より多くの個体を試験できます。加えて、天候の影響を受けず、最短2ヶ月程度で抵抗性の評価が可能になります。

青枯病に罹病したバレイショ



(農産園芸研究部門 花き・生物工学研究室)

圃場での評価法



特徴

- ・年に一度しか試験できない
- ・試験できる個体数が少ない
- ・正確な抵抗性評価には数年必要
- ・天候等の影響を受ける

試験管での評価法



特徴

- ・年に何度も試験可能
- ・より多くの個体が試験可能
- ・数か月で抵抗性評価が可能
- ・天候の影響を受けない



4月出荷量増加のためのバレイショ「アイマサリ」安定生産技術の確立

●背景・ねらい

本県のバレイショは、4月出荷ができるトンネル栽培が減少し、5月中下旬に出荷が集中しています。そのため、4月出荷の割合を高めるための技術確立が求められています。本県が育成したバレイショ「アイマサリ」は平成29年9月に品種登録出願公表されました。本品種はジャガイモシストセンチュウおよびジャガイモYウイルスに抵抗性で早期肥大性があり、主力栽培品種「ニシユタカ」に比べて出芽期が早いことから4月出荷が可能です。そこで「アイマサリ」の安定的な4月出荷を可能とする栽培技術の確立に取り組んでいます。この安定生産技術により、労力分散や、高単価時期の生産量の増加が期待でき、本県バレイショの産出額並びに生産者の所得向上に寄与することができます。

(農産園芸研究部門 馬铃薯研究室)

労働力不足により減少

トンネル栽培



べたがけ栽培



マルチ栽培



◆研究方法

①植え付け時期に対応した
種いもの管理および被覆資材の活用
(春作マルチ地帯)

	従来	研究方法
種いもの来歴	一期作産 秋作産温蔵	→ 春作産冷蔵 一期作産 秋作産温蔵
植付け日	1月中下旬	→ 1月中旬
収穫日	5月上～下旬	→ 4月下旬、5月上旬
被覆資材	透明マルチ	→ べたがけの有無

②現地試験による技術体系の早期確立
⇒南島原市で実施

【期待される成果】

4月中に単収300kg/a以上を確保できる栽培技術の確立

◆春作マルチ地帯

マルチを被覆した上で、べたがけを使用して栽培

◆無霜地帯

べたがけ、トンネルを使用せず、マルチ被覆での栽培

【効果】

- ◎ 農家所得の向上
- ◎ 労力分散、労働ピークの軽減
- ◎ 春作バレイショの産出額増加

ハラン切り葉の品質向上技術の開発について

●背景・ねらい

森林所有者が木材生産以外に、耕地の狭い中山間地において、短期的かつ安定して収入を得るために、ハランの林間栽培への注目が高まっています。

ハラン切り葉の生産は、市場から増産を望む声が挙がっていることもあり、県内関係各者が連携して増産、品質向上への取り組みを行っています。

現場では、繁茂による作業性の低下や、単価の高いシマハランの収量が著しく低下する青葉化の問題が発生していますが、青葉化が進む原因については明らかになっていません。今までの調査から、定植後10年以上経過すると青葉率が増加しますが、株分けにより青葉率は低下することが分かっています。また、株分けは作業性の改善にもつながるため、定期的に行うことが望ましいのですが、労務の負担が大きいことから積極的には行われていないのが現状です。

そこで、ハラン切り葉の品質向上と安定生産のため、ハランの個体条件及び環境条件が青葉の発生に与える影響を調査し、青葉化の原因を解明するとともに、定植後10年以上経過したハランにおいて省力的で品質及び作業性を向上させる、密度管理手法の検討を行います。

(森林研究部門)

葉の品質に影響を与える要因の 解明

ハランの個体条件及び環境条件が
ハランに与える影響の調査

TR率2水準 × 植え付け深さ2水準 × 密度2水準 × 明るさ2水準

栽培技術の開発

密度管理手法の検討

葉刈り・掘取り試験
実施時期(夏、冬)、強度



葉の刈り取り



掘取り

ハラン切り葉の品質向上 技術の開発 生産の効率化・単価向上



ハラン栽培圃場



左:シマハラン
右:アオハラン

低コスト生産を目指した黒毛和種(肉用牛)雌牛肥育技術の確立

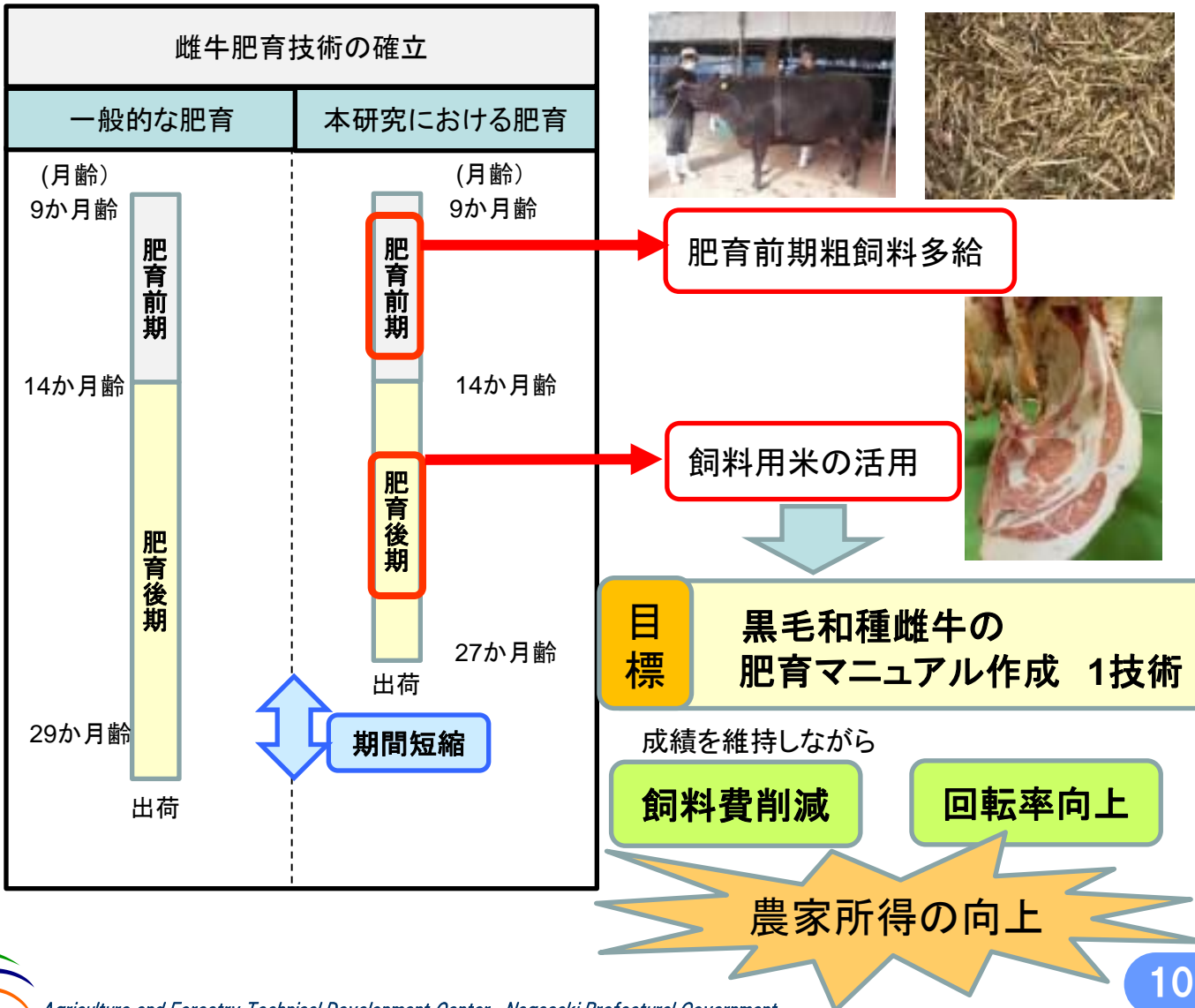
●背景・ねらい

近年、肥育素牛である子牛の価格は上昇しており、肉用牛肥育農家の経営を圧迫しています。県内の肥育農家は去勢牛肥育が主体であり(県内肥育頭数の約70%)、雌牛肥育については去勢肥育に比べ素牛価格が安いメリットがあるものの、枝肉重量が小さく肥育期間が長いというデメリットがあることから、取組農家が少ない現状にあります。

また、国産飼料による自給率向上は喫緊の課題となっており、全国的に飼料用米の活用が推進されていますが、県内の肉用牛肥育ではその利用がまだ進んでいません。

そこで本研究では、雌牛肥育における肥育期間の短縮や飼料用米の活用による低コスト生産技術の確立を目的としています。

(畜産研究部門 大家畜研究室)



農林技術開発センター研究成果報告会の開催

長崎県の農林業試験研究は1898年(明治31年)、長崎市中川町に長崎県立農事試験場が開設されて以来、本年で120年を迎えました。

そこで、近年の研究成果を発表し、生産現場への更なる成果の普及を図るとともに、新たな研究に反映させることを目的に、平成31年1月10日(木)諫早市たらみ図書館において、研究成果報告会を開催しました。

当日は、県普及指導員、農業団体、農業者等130名参加のもと、近年の農林業の発展に寄与した事例として、「イチゴ「ゆめのか」の特長を活かした栽培技術の確立と産地への普及」と「ビワ混合発酵茶の開発と商品化に向けた取り組み」の2つのテーマで、研究の立場からと普及・商品開発の立場から成果が発表されました。

その後、各研究部門から研究成果の発表やポスターセッションも行われるなど、試験研究と普及、実需者が有意義な意見交換を行う機会となりました。



「農事試験場創設」の石碑(長崎市中川町)



発表会場



ポスターセッション会場

諫早湾干拓地における秋の学童収穫体験の開催

平成30年12月1日(土)に農林技術開発センター干拓営農研究部門の圃場で、学童を対象に秋の収穫体験を行いました。7学童クラブ(諫早市4、長崎市2、大村市1)、約200名の子どもたちが種まきや収穫を体験しました。

はじめに菜の花の種まきを行い、その後、だいこん、にんじん、じゃがいも、レタス、キャベツと次々に収穫していきました。今年は野菜の種類も多く、子どもたちは満足したようで、レタスとキャベツの違いについても学ぶ機会となりました。



にんじん収穫



キャベツ収穫

発行  長崎県農林技術開発センター

〒854-0063 長崎県諫早市貝津町3118番地 TEL 0957-26-3330

<https://www.pref.nagasaki.jp/e-nourin/nougi/>